

月明

豊島与志雄

青空文庫

ふんどし
禪一つきりの裸体の漁夫が、井端で、大漁の鯆あじを干物に割いて
いた。

海水帽の広い縁で、馬車馬の目隠しのように雨の頬を包んで、
先に立ってすたすた歩いていた姉が、真直を向いたまま晴れやか
な声で、

「今日は。」

と声をかけると、漁夫も仕事の手元から眼を離さずに、尻上り
の調子で、

「今日は。」

姉の後に続いていた俊子が、これも海水帽の縁の中で、くすりと笑った。その拍子に、海水着一枚の背中の肉が擦ったような震えをしたのを、彼は後ろからちらりと見た。

姉ははふいに振り返った。

「何を笑ってるの。」

「だって、あんまり挨拶がお上手だから。」

「そう。」

遠いような近いような海の音があたりを包んで、晩夏の日がじりじり照りつけていた。

「この辺はそれは質朴だから、」とややあつて姉は思い出したよ

うに、「誰に逢つても今日はと挨拶をするのよ」

「ほんとにいい処ね。私すっかり身体もよくなったような気がするわ。」

姉は勝ちほこったように、も一度後ろを振り向いて俊子の顔を見た。俊子が軽く肺炎を病んで、適当な避暑地を物色していたので、彼等姉弟と伯母——と云つてももう五十の上を越した——と三人で避暑することになっていた、この上総の海岸へと姉が誘つた時、停車場から一里半もある辺鄙な土地ではあるけれどと云われて、俊子は一寸躊躇したのではあつたが……来てみると、辺鄙なのが却つてよかつたのだ。東京から入り込んだ客は、彼等を除いて、その部落に六七人とは数えられなかつた。

「気兼ねする大勢の避暑客がないのが、一番いいわね。」

「その代り、静夫みたいな悪戯者いたずらものが居るから、気をおつけなさい。」

「あいた！」

四五歩後れてぼんやりしてる所へ、自分の名前がふと耳についたので、何を云ってるのかと思つて足を早めたはずみに、叢に踏み込んだ蹠を何かでちくりと刺された。彼は飛び上つて足を抱えた。

「どうしたの、頓狂な声を出して。」

掌で砂を払い落して蹠をしらべたが、もう何処が痛いのか分らないくらいに、何の傷跡も残つてはいなかった。

「蟹でも踏みつけたのかと思ったが、何でもなかった。」

それでも、俊子が気懸りそうな眼付でじつと見てくれたのが、彼には嬉しかった。その嬉しさを、他人にも自分にも押し隠すようにして、馳け出してやった。

二

川の干潟や陸には、甲羅の赤い小蟹が沢山居た。その蟹が殆んど居なくなつた川口で、水にはいるのであつた。広漠たる大洋に面した浜では、荒波が危険で泳げなかつた。

「も少しこちらへいらつしやいよ、泳ぎを教えてあげるから。」

膝までしかない所に坐つて、手先でじゃぶじゃぶやつてる俊子へ、姉は川の真中から呼びかけた。満潮にさえならなければ、何処でも背のたつ浅い川だったけれど、俊子は決して中程まではやつて来なかつた。

「教えてあげるは大きいや、」と彼は引取つて云つた、「自分でよく泳げもしないくせに。」

「何を云つてるの。じゃあ泳ぎつくらをしましうか。」
「しよう。」

せいぜい二十間ぐらいしか泳げない姉だったが、いつまでも後からのこのこついて来た。よく見ると泳ぐふりをして歩いてるのであつた。彼は少し速力をゆるめて、姉が近づいた頃合を見計つ

て、いきなり水にもぐった。足を捉えて引きずり込んでやるつもりだった。が……その足が見当らなかつた。暫くしてひよいと水から首を出してみた。姉は早くもそれと察して、俊子の方へ逃げ出していた。彼は追っかけていった。姉は漸く俊子の側まで逃げのびると、俊子の腕につかまって、息を切らしながらも笑っていた。

俊子と一緒にでは仕方がなかつた。それでも癩だつたので、水をぶっかけてやった。

日の光りの中にぱつと水^{しぶき}沫が立って、その下から、

「お止しなさいよ……そんなこと……卑怯よ。」

それが、姉の声だか俊子の声だか分らなかつた。また水をぶつ

かけようとすると、二人は岸の方へ逃げていった。

「もうあなたと一緒にには水にはいらぬ。」

顔に浴びせられた水を掌で拭きながら、姉は怒った風をした。

「だってあなたの方が悪いわよ。」

と俊子は云つて、まだ笑つてる眼付で彼の方をちらと見た。

彼は大きな赤貝の殻を拾つて、川の方へ力一杯に投げた。その真白いのが空高くくるくると廻つて、水の上にぽちやりと落ちた。

なだらかな砂地こころよが快く温まっていた。

海の岸まで行つて、其処に身を投げ出した。

一色の青のうちに平らに見える海が、一町ばかりの沖の方から大きな波に高まつて、やがて白い波頭をふり立てながらざざざざ

と寄せてくるかと思うまに、頂^{てっぺん}辺からどつと崩れて捲き返した。それが無数に連つて、松林と砂丘との真直な九十九里ヶ浜を、眼の届く限り遠くまで……末は茫とした水煙のうちに霞んでいた。耳を澄すと、ごーという地響きに似た音だった。その合間に、ごく近くに、さらさらと軽やかな音とも云えない音がする。風に吹かれた金砂が、日の光りに粉のように輝いて、浜辺を一面に走っているのであった。濡れた海水着が、いつのまにかそれを一杯浴びていた。

「そんな強い風でもないのに、ひどい砂ね。」

ひとりごと
独語った姉の言葉に、俊子は沖の方を見ながら答えた。

「だって可なり強いんでしょう、あんなに波が立ってるから。」

「それは外海の波ですもの、風がなくても高いわよ。」

だが、一処、妙に波が低くて白く捲き返さない場所が、すぐ向うに見えていた。

「あら、あすこはどうしたんでしよう。」

俊子ばかりでなく、姉もまだそれを知らなかった。

「あすこで泳ぐと面白いんですよ。」

そう云つて彼は眼を円くしてみせた。

「どうして。」

「一里ぐらい沖まで持つて行かれちまうんです。」

「え、沖へ？」

「潮の加減で引力が強いです。それに乗ったが最期、沖へ流さ

れるより外ありません。普通に、みおと云ってますが、漁夫達でさえ恐れてるくらいです。そんなのが方々にあるから、この海ではうっかり泳げません。毎年死ぬ人があるんですよ。」

「本当？」

姉が吃驚びっくりした顔をして彼の方へ向き直った。

「本当ですとも。もつと面白いことがありますよ。地引網じびきにね、時々大きな鱯ふかや鮫さめがかかってくるんです。するとその腹の中から、人間の頭がよく出てくるんですって。」

「まあ、いやなこと！」

その叫びにも無頓着かのように、俊子はやはりじっと沖の方を見続けていた。

「もう帰りましようよ。何だか気味が悪いから。」

広い砂浜には、太陽の光りがじかに照りつけてるきりで、誰の姿も見えなかった。彼方に数隻の漁船が、置き忘られたように静まり返っていた。

「海を見てると、何だか引き込まれるような気がするものね。」
俊子はそう云って、初めて我に返ったらしく立ち上った。

三

気味が悪いと云いながらも、姉は地引網を引張ってやるのが好きだった。

朝早くから十時頃まで、波がさほど高くない時、海岸の方々でそれが行われていた。

「立って見てねえで、手伝ってくれたらよかんべえ。」

そういう囁きが耳にはいつてから、姉はいつも着物の裾をからげて、逞しい男女の間に交って、地引網の綱につかまった。一生懸命に引張つてはいるのだが、つかまつてるのと大差なさそうだった。彼も時々綱を引いてみた。沖に引かれる力の強さを手に感じて、ともすると足がよろけそうだった。ただ俊子は、少しも手出しをしなかった。

鱒かますや梭魚かますの類が、少い時は桶四五杯多い時には三四十杯も取れた。特殊な魚だけを別により分けて、残ったのを桶一杯ずつ砂の

上に積み上げた。買手が大勢来て待っていた。

「手伝った東京者に、これをくれてやるべえ。」

幅利きらしい男が大きな太刀魚をぽんと投ってくれた。

「有難うよ。また手伝うべえ。」

姉はおかしな調子で云い捨てて、まだびんびんしてる太刀魚を、
尾でぶら下げながら飛んでいった。

「豪勢威勢のええ女あまつちよだなあ。」

地引が上ると漁夫達は皆機嫌がよかった。姉も機嫌がよかった。

「どう？」彼女は俊子の前に手の魚を振ってみせた。「私が海に

はいつてつかまえたのと同じことよ。」

「そうね。」

苦笑とも揶揄ともつかない俊子の言葉に、姉は一寸意気込んでみせた。

「私は海で鍛えた真黒な人達の間に通って、その生活を味うのが好きよ。あなたはもつと元氣にならなくては、折角海に来た甲斐がないわよ。松原を歩いたり海岸をぶらついたりするきりでは、つまらないじゃないの。」

「私には、馴れないせいか、自然の方が面白いような気がするわ。」

「どうして。」

「どうしてって、云ってみれば、海には海の大きな霊といったよ
うなものが感じられるから。」

「また例のロマンチックが初つたのね。」

「そうじゃないわよ。私此処に来てはじめて、海には海の霊があることを、どうしても否定出来ない気がしてきたのよ。……静夫さんはどう思つて？」

彼は何と答えてよいか分らなかつた。が兎に角、彼女の言葉をじつと聞いてると妙に不安になつた。

「そんなことを云つてた漁夫があります。」

「そんなら、」と俊子は姉の方を向いた、「私の方が漁夫の生活によつぽどよく触れてるわけじゃなくつて。」

「駄目よ、あなたのはみんな空想だから。」

「そうかしら。」

振り返ると、海は波頭に朝日の光りを受けて、沖遠くきらきら輝いていた。その輝きが無くなる頃から、海鳴の音が更に高まってくるのだった。

四

俊子の所謂海の霊を、彼女が最もよく感ずるらしいのは、夕方から夜にかけてであった。

彼等が借りてる別荘とも百姓家ともつかない家は、その部落と松林との境に在った。

「早く御飯にして散歩に参りましょう。」

明るいうちに夕食をして、大儀だからという伯母と女中とを残して、若い者だけで散歩に出た。

松林の裾を廻つて、薩摩芋の畑の間を少し辿ると、川の岸に出る。橋を渡つた向うが低い堤防をなしていて、その向うに青々とした水田が、はるか海岸の砂丘まで連る。

華かな残照が西の空に残っていた。海を渡り稲田の上を渡つてくる風が、昼間の暑気を吹き払つて、遠い夕靄のうちに流れ迄んでゆく。その風の反対に、所々に川柳の茂みを持った堤防を海の方へ、三人は楽しげに語りながら下つていった。ゆるやかな川の面に落ちていた三つの淡い長影が、茫と水の色に融かし込まれる頃になると、話はいつのまにか途絶えていた。姉は歌を歌い出し

た。俊子がそれに和した。ダニューブ河の歌やローレライの歌がくり返された。古臭い歌だなど思っていた彼も、いつしかその調子を覚えてしまった。ただ口に出しては歌わなかった。

海岸へ出る頃には、たそがれ黄昏の明るみが月の光りに代りかけていた。茫と青白く光る海岸線が、魔物のような波音をのせて遠く続いていた。

「いつまでも歩きたいような晩ね。」

「ええ……でも、沖の方を見ると何だか怖いようね。」

薄ら明りに変に大きく見える手を伸べて、姉がさし示した沖合は、ただ一面の黒に塗られて、淡く射す月の光りと波音とを、底知れぬ深みへ吸い取っているようだった。

「だけど、沖に出てみると案外恐ろしくないかも知れないわ。丁度、墓地は外から見ると恐いけれど、中にはいると何となく賑やかだというじゃないの。海も墓地と同じようなものじゃないかしら。」

「そんなら私なお恐いわ。幽霊船でも出て来たら、あなたどうして？」

「そうね……。。」

暗い海を背景にして灰白く浮出している俊子の顔が、一寸揺れたかと思うと、低いおどけた声で、

「ばアーと云ってやるわ。」

それが変に不気味だった。

「いやな人！」

投げ出すように云った姉の言葉のすぐ後を、彼は横合から続けた。

「この沖にも幽霊船が出ることがあるんですって。」

「嘘！」と云った姉の声は少し慍えていた。

「嘘ではありません。船の姿が見えないのに櫓の音が聞えたり、真黒な帆前船がすーっと側を滑りぬけたりすることが、よくあるんだそうです。」

「それは、風の工合で遠い櫓の音が聞えたり、本当の船をそんな風を感じたりするんだわ。」

「所が変なんです。或る時沖に釣に出た船が、夜になって戻って

来たことがあるんです。その漁夫達の話ですが、薄暗くなつて帰りかけると、いくら櫓を押しても船がなかなか進まなかつたんですつて。それでも一生懸命に漕いでると、不思議なことには、一町ばかり離れた後ろの方から、やはりせつせと漕いでくる船があるんです。櫓の音も掛声もしないのに、船の姿や人の影だけがありませんと見えていて、その上、近寄りもしなければ遠ざかりもしないで、いつも同じ速さはやでついて来ます。少し気味悪くなつてきたので、漁夫達は力のあらん限り漕ぎまくつて、漸う岸まで戻つてきて、ほつと後ろを振り返ると、今まで同じ速さでついてきていたその船が、何処へ行つたか消え失せてしまつてゐるんです。その時はほんとにぞーつとしたと云つていました。」

まあーと云ったように、姉は眼をきよとんとさし口を開いて、彼の顔を見守った。

「そんなこともありそうですわ。」と俊子は静かな声で云う、「海には一つの霊がないとしても、何かのいろんな霊が籠つてゐるに違いないわ。」

波の音がその声を、上からどーつと押つ被せてしまった。が、その波音の中にまた何か変な気配がした。上を仰いで見ると、一羽の黒い鳥が低く飛び過ぎた。

彼はぎよつとした。思わず俊子の方へ身を寄せると、俊子は眼と口元とで軽く微笑んでみせた。その顔が怪しく美しかった。彼は胸の中でぎくりとした。度を失つてまごついてると、俊子は瞬

間に眼を外らして、腕につかまってきた姉の方へ云っていた。

「臆病な方ね。鳥じゃないの。」

「だって、私何かと思つたわ。生きたものならちつとも恐くないけれど、怪しい変なものは大嫌い。」

「私はまた、お化^{ばけ}ならちつとも恐くないけれど、人間が一番恐いわ、何をされるか分からないから。」

月の光りが急に明るくなってきて、広い砂浜が蒼白く輝らし出された。

五

彼は朝早く起きるのが好きだった。鶏の声が聞えて東の空が白む頃から、何物にも遮られない、灰白い——而も澄み切った朝明りとなった。ここ荒海の岸辺では、夜と昼との境をなす朝霧は、一度夜が明けてから後に初めて、森や部落のまわりに立ち罩めるのだった。黎明の頃は大気が澄みきっていた。日出前に東の空へきまつて出てくる黒雲の縁が、黄や紅に彩られて、それがじかに朝明りの中へ反射した。魂の底まで浄められるような曙だった。

「姉さん起きなさいよ。日の出を見に行きましょうよ。」

二三度搔ゆすぶられて、姉は漸う眼をこすりながら起き上った。まだ一度も、海から太陽の出る所を見たことがなかった。

「そりや何とも云えねえぞうー。見た者でなきやあ分んねえ。」

水瓜すいかを売りにくる婆さんがそう云った。だが、日出時の東の水
平線は大抵雲に閉されていた。

「晴れてるの。」と姉は尋ねた。

「ええ。」

曖昧な調子の返辞だったが、それでも姉は起き上ってきた。

これが例の二葉より香しというあの木かしらと怪しんだ、大きなせんだん旃檀の木の下に転ってる、木の切株の上にあがって、更に爪
先で伸びあがって、東の空を透しみたが、まだ黝ずんでる大空の
色と見分け難いほどのものが、低く横ざまに流れていた。

「あれは雲じゃないの。」

「さあ……。」

横飛びに飛んで、向うの無花果の木の低い枝につかまり、ぴよんと跳ねて葉の間から覗くと、黒雲の下がすつと切れて、紅をばかした銀色に輝いていた。

「大丈夫ですよ、下が切れてるから。」

海鳴の音がいつもよりはつきり聞えていた。地引網の喇叭が響いてきた。たとい日の出が見られなくとも、損にはならなかつた。それにもうどうせ起き上つたのだから。

「俊子さんも起してくるわ。待っていらつしやい。」

彼が深呼吸をしてる間に、日に焼けた姉の浅黒い顔と俊子の蒼いほど白い顔とが、ふわりと飛んできた。

草の葉末にたまつた露を踏んで、粗らかな松林の裾をぬけると、

その向うがすぐ海だった。松の間から東の空がちらちらと見えていた。

「あら、あんなに雲がかけてるわ。」

僅かな雲だと思つたのが、暫くの間に東の空を蔽い隠して、なお次第に拡がりそうだった。

「仕方ないから地引網の綱でも引くんですね。朝っぱらから景気がいいですよ。」

砂丘の上に、蟻のような人影が見えていた。

「知らないわ。……こんなに早くから人を起しといて！」

つんと澄してすたすた足を早める後から、俊子は落付いた声で注意した。

「でも、他で見られないような変な朝ね。」

東の空の大きな黒雲の影に包まれて、盲たようなただ白い明るみが遠くまで一様に澄み切っていた。

真先に歩いていった彼は、俄に足を止めた。松林のつきる処に四五本の雑木があつて、その下枝のあたりに、白いものが真円く浮出してゆらりと動いた……と思つたのは瞬間で、よく見るとだらりと垂れ下っていた。

ぞーっと身体が悚んだ。が、引き止めた息が保ちきれなくなつた間際に、ほつとした。木の枝に提灯がかかつてるのだった。

「どうしたの。」

黙って歩き出すと、此度は喫驚した調子の声で、

「蛇でも居たの。」

彼はやはり黙って頭を振った。何だか白茶けた気持ちになった。ぼんやり眼を挙げて眺めると、提灯は白張りの無紋だった。それが一寸変だった。

「あら、静夫さんは蛇がお嫌い？」

わざと不思議がったようなしなをした声だった。

「ええ、可笑しいほど嫌いなよ。」と真中に居る姉が答えた。

「そう。私はどちらかという好きな方よ。」

「蛇が！」

「ええ。もとは嫌いだったけれど、だんだん好きになるような気がするわ。一番いやなのは蚯蚓、ぬらぬらしてるから。」

蚯蚓がいやで釣が出来ない自分のことを思い出して、彼はふと振り返つてみた。

俊子はもう眼を地面に落して、其処に匍つてる蚯蚓の上を飛び越していた。その顔が、気のせいか、提灯と同じような白さに見えた。

六

晴れた日には、地引網を見たり、水にはいったり、散歩をしたり、松林の中に迷い込んだり、畑の薩摩芋を盗みに行ったり、遊ぶことはいくらもあつたが、雨の日は退屈で仕方がなかつた。雨

と云えば大抵風雨だった。

南寄りの東に海を受けてる土地だったが、海鳴の音は多く南か北かに聞き做された。南で鳴れば不漁、北で鳴れば大漁、としてあるその海鳴が、風雨の晩は南にも北にも聞えた。その響きに包まれて、雨と風との音がざあーと雨戸にぶつかってきた。

「あれ、今時分どうしたんでしょう？」

耳を澄すと、なるほど地引網の時と同じ様な喇叭の音が、遠くかすかに伝わってきた。

「船上げですよ。」

「船上げてなあに？」

「波が高いから、漁りようし夫達を集めて船をずっと陸の方へ引上げる

んです。姉さんはそんなことも知らないんですか、通^{つう}ぶつてくる
せに。」

やりこめられたことも知らないで、姉はただ不安そうに眼を見
張った。

「そんなに波が高いかしら。……いやな音ね、難破船でもありそ
うな。」

「あるかも知れませんか。」
ランプの光りが妙に薄暗く思われた。

「今にこのランプの光りが暗くなつてくると、海坊主がのっそり
とはいって来るかも知れません。」

「馬鹿なことを仰言い。海坊主なんていうものが居るものですか

。
「

「居りますとも、現に見た者があるんです。」彼は口をつんと尖らしてじつと姉の顔を見つめた。「夜遅く漁から帰ってきますとね、俄に海が荒れ出して、それを乗りきってゆくうちに、人間の形をした真円い山が向うに聳えているんです。然し一日のうちにそんな山が出来るわけはありません。こいつ怪しい奴だなというので、船頭達は力一杯櫓を押しながらその真中目がけて船を乗りかけたものです。すると、山の中を船がすーっと抜けた、山は後ろにやはり聳えてるんです。船頭達は胆をつぶして、なおえっさえっさ漕いで行くと、何処からともなく温い風が吹いてきて、眼も口も鼻もないノツペラボーが船の舳に手をかけて、ぬっと伸び

上つて、それから……恐いかあ……。」

「何ですね、変な声を出して？」と伯母が横合から笑いながら口を入れた、「それは王妃のお百の海坊主じゃありませんか。」

「伯母さん知ってるんですか。そんなら話すんじゃないか。」

姉はほっとした様子で、それでもなお気味悪そうな色を浮べて、姉の方を睥んだ。

「おどかさうたつて駄目よ。化物なんか居るものかと云つてた癖に、化物鬣肩の俊子さんがいらつしたものだから、すっかりかぶれちやつて、つまらない話をしてるのね。」

「あら私が化物鬣肩だなんて……。」

とは云つても、俊子は眼付で笑っていた。

それきりあたりがしいんとしてきたのを、姉は突然大きな声で、「さあ、先刻の続きをやりましょう。」

船上げの喇叭に中断せられたランプが、また初められた。

云い出した姉へ、彼は美事にスペートのクインをつけてやった。そこへまた姉は、俊子からスペートの五を背負い込ませられた。

「いいわ、覚えていらつしやい。分つてるわよ、化物同志で私をねらつてるのね。」

俊子は彼と眼を合わして、くすりと笑った。口元に指で押したような凹みが寄つて、ちらと瞬いた睫毛が、鳥の翼みたいな影を眼の中に落した。

ハートの切札の時に勝つようと、彼は何がなしそんなことを

心に念じた。

けれど、そういう遊びのうちにもともすると、真暗な夜が忍び込んできた。風はいつのまにか止んで、しとしととした霖雨を思わせる雨音だった。それがなお戸外の夜の暗さを偲ばせた。此処に来て初めて、鼻をつままれても分らない闇夜を知ったという、その暗闇が室の隅々から覗いていた。

「明日も海が荒れそうですね。^{あした}」

南に廻った海鳴の音をじつと聞いていた伯母が、トランプの方をそっちのけにして云った。が誰も返辞をしなかつたので、伯母は一旦噤んだ口をまた開いた。

「もう二三日で九月ですね。」

滅多に海へも行かない伯母は、早くから退屈して東京へ歸りたがっていたが、俊子のためにといふので、皆と共に八月一杯滞在することになっていた。その八月がもう二三日きりとなつてゐるのだつた。

「あと僅かだから、うんと遊びましようよ。私徹夜しても構わないわ。」

だが、そういう姉の声も、昼間からの遊びに疲れはてていた。

「負けると猶更止められなくなるんですつてね。」

「あら、あなたの方が負けが込んでるじゃないの。」

「そうかしら。」

点取りの表を覗き込んだ俊子の細そりした頸筋が、彼の眼の前

に滑らかな皮膚を差伸べた。

七

明日東京へ帰るといふ日は、朝から綺麗に晴れていた。これを最後までといふので、地引網にゆき、海岸をぶらつき、水にはいり、また松林の中を歩いた。春には松しゅうろ露が沢山取れるといふ松林の中には、所々に名もない筆が出てるきりだったが、その代りに、尾長おながと俗に呼ばれてる白と黒と灰と三色の美しい鳥が沢山居た。巢立ったばかりの雛が枝から枝へと危つかしく飛び移っていた。

彼はその雛の小さいのを一つ、松から揺り落して家の庭に持つ

て来た。持つては来たが、さてどうしていいか分らなかつた。

「あら、なあに？」

張りのある澄んだ俊子の声が響いたかと思うと、此度はやはり彼女の喉にかかつたゆるやかな声が、

「まあ、可愛いんですね。」

飯粒を持つて来てくれてやったが、食べようとしなかつた。地面に置かれるときよとんとした眼付をしてじつとしてるのに、掌に取られると小さな羽をばたばたやった。

「可哀そうですわ。助けておやりなさいな。」

「ええ。」

と答えて行こうとすると、後ろから、彼の方へ呼びかけるので

もなくまた独語でもなく、何気ない調子で、

「もう今日きりね。晩にまた海へ出てみましようか、屹度月が綺麗ですわ。」

振り向いてみると、彼女は顔の下半分で微笑んでいた。が、じつとこちらを見る黒目がちの眼が、変に熱く鋭く感ぜられた。

彼はやはり場を失った眼を俄に伏せて、松林の方へ馳けていった。

その日見た——初めてのようにしみじみと而もひそかに見て取った彼女の姿が、頭の奥にこびりついていた。——地引網が上ってくるのを、まじろぎもしないで見つめてる立ち姿が、肩がしなやかにこけて、臀から股のあたりにむっちりとみがはいつていた。

——水から出て海岸の砂に寝そべりながら、赤く日に焼けた上膊から剥がれる薄い皮を、しなやかな指先でそつとつまんで引張りながら、

「こんなに皮がむけてきたわ、もう一人前ね。」……だが、濡れた海水着がびったりとくっついてる痩せた胸には、姉のに比べるに余りに小さな、ぽつりとした乳房が淋しかった。——湯から出てお化粧をしてる所を覗くと、「見ちやいやよ。」と云いながら、なお平気で彼の眼の前に曝してる半裸体の、他が日に焼けるせいも、海水着のあとが殊にくつきりと白くてこまやかだった。

——縁側からぶら下げてる足指の子供々々した爪の恰好に、梨をかじりながら見とれていると、その足がぬつと前へ出たので喫驚

した……が、瞬間に立ち上った彼女は、ぼんやり見上げた彼の眼へちらと微笑みかけた。その顔が、眼ばかり大きくて真白だった。強く握りしめていた掌の小鳥に彼はふと気がついて、それを低い松の小枝に放してやった。ばたばたと羽ばたきをして小刻みにちよつとあたりを見廻して、それから一枝ずつ、高い梢の方へ飛び上つていった。ごーつと鳴る松風の音がその後を蔽いかくした。頼りない淋しい夕方だった。

「なぜかは知らねど心迷い、むかしの伝説のいとど身にしむ……」
つたえ

いつのまにか聞き覚えた歌の節が、一人でに口から出ようとす
るのを、彼はじつと抑えつけた。彼女の歌を歌うのが、心のうち

に憚られるような気持ちだった。

見えないほどの空高くに、松の梢越しのまだ夕明りの空に、星が一つきらめいてるらしかった。「恋せよ、恋せよ！」と何かが囁く。「恋すな、恋すな！」とまた囁く。

それに耳を澄すと、「凡て空なり！」初秋の風の音がごーつと鳴っていた。

八

「今じきにいくから、遠くへ行かないで待ってて頂戴。」

こまこましました道具を明日の出発のために片付けていた姉は、そ

う云いながらもやはりゆっくり構え込んでいた。はいりきれないほどの品物をどうにかつめ込もうと、バスケットの側にいつまでもくっついてる伯母の方は、姉よりも更に気長だった。

「ほんとにいい月よ。」

俊子の言葉をきっかけに、彼もぷいと外に飛び出した。

東の空に出たばかりの月は、松林に距てられて見えなかつたけれど、ランプの光りの薄暗い家の中よりは、もっと明るいはつとした夜だった。物の影が長く地を匍つてる上を、二人は黙つて海の方へ歩いていった。

踏み込むと冷りとする叢の中で、虫がしきりに鳴いていた。それへ月の光りがくつきりと落ちてゐる処で、二人はふと足を止め

て、姉が来るのを待った。

「私何だか明日帰るのだという気はしませんわ。静夫さんは？」
明日帰ることばかりではなかった。此処に来たことが、今こうしていることまで凡てが、夢のように思われた。黙っていると、波の音が遠くに聞えだしてきた。

「海は实际いいですね。」

「ええ、ほんとに！」

と俊子がすぐに応じてくれたけれど、変に気まずく思われた自分の言葉の調子が、まだ彼の頭から去らなかつた。つと横を向いて、大事に持ってきたABCに火をつけた。

「いい匂いの煙草ですわね。私も吸ってみようかしら。」

彼が黙って差出したのを、彼女は笑いながら一本取ったが、

「ああ、これは駄目。吸口がないから。」

戻されるのを受取る拍子に、息がつまるような甘っぱい化粧の香りが、ぷんと彼の鼻にきた。

姉はいつまでも来なかった。

「海まで行ってみましようか。」

その顔を何気なく見上げると、白々と月の光りに輝らされた中に、底光る黒目と赤い唇とが、まざまざと浮出して見えた。

彼は身体が堅くなるのを覚えた。静かな夜、月の光りの中に、彼女と二人で立っていることが、息苦しくて不安だった。余りに目近く彼女の側に居ることが、しみじみと胸にこたえて、身の動き

が取れなかった。それを、黙つたまま歌も歌わないで、彼から追つつかれるのを待つかのように、ゆつくりと足を運んでる彼女の後ろ姿が、ぐいぐい引きつけていった。黒い髪のはじから覗いてる耳朵の下に、四五筋のほつれ毛がそよいでいた。

松林の影にはいった時、波音が俄に高く聞えてきた。足下の草は露に濡れていたが、松の梢はかさかさ乾いていそうな夜だった。暫く行くと、その向うの左手に、四五本の雑木が、こんもり蹲っていた。彼ははつとしたが、足を止めるまもなく、先日の提灯はもう無くなつてることを知つて安堵した。

と同時に、ぱつと明るくなった。薄暗い海を背景にして、なだらかな砂浜が浮き上つていた。見渡す限り広々として何も無い、

冴え返った月の光りが、降り濺ぐように一面に落ちている。波の音が消えて、しいんとした蒼白い明るさだった。透明な深い水底でもあるかのよう……円い月がぎらぎら輝いて見えた。

彼は足を早めて俊子に追い縋ろうとした。途端に、鉛色の月の光りが彼女の髪をすつと滑り落ちて、振り向いたその顔が、真白な歯並と真黒な瞳とを投げ出して、にっこり微笑んだ。瞬くまも許さない咄嗟だった。

ぞつとした。ぶるぶると身体が震えた……とまでは覚えていたが、あとはただしいんとなった。

「静夫さん！」

胸にしみ通るような細い声が聞えたので、彼はふと眼を見開い

た。嵩高な女神の端正さを持った俊子の上半身が、降り濺ぐ月の光りの中に浮んでいた。……と思うと、心持ち左に傾いたその顔が、ぼやぼやとくずれた。

彼女の腕の中に在る自分自身を、彼は全身で感じた。細かな震えが背筋を流れて、歔歔と涙とがこみ上げてきた。……が、

「どうしたの。」

彼女の声は澄みきって響いた。

それでまたぞつとした。いきなりその腕を払いのけて、砂浜の上を駆け出した。後から彼女が追っかけてきた。息がつけなかった。砂の上にどっかと坐って、眼をつぶった。

「静夫さん！」

柔かな手を肩に感じた時、彼は初めて我に返った心地がした。眼を開いてみると、それはいつもの俊子だった。

見開いた眼が濡んでるようだった。高い鼻のために淋しく見える頬が、血の気を失って、真蒼だった。きつと結んでる口が少し開いて、やさしい含み声で、

「何に慍えたの！」

云ってしまったって彼女はほっと息をした。

彼はぼんやり立ち上った。

「恐いことを思い出して……。」

とでたらめに云い出したのを、彼女からじつと覗き込まれて、先が云えなくなつた。頭の奥がしいんとして、胸が高く動悸して

いた。二人共黙り込んで、沖を眺めやった。時の歩みが止つたよ
うな時間だつた。

そこへ、姉がこちらを何やら呼びかけながら、向うの松影から
駆けてきた。

彼は初めて、俊子の眼をじつと見入つた。それに応えて彼女の
眼付が首肯うなずいた。瞬間に彼女はくるりと向き直つて姉を迎えた。

岸に近い波音を、月の光りが上から押つ被せていた。が、海は
沖の方でも鳴つていた。

九

東京に帰ると、海岸よりむし暑くはあつたが、それでも秋がしみじみと感ぜられた。避暑地気分がなくなつたせいばかりではなく、朝は冷かな霧が罩め、晩には凡てのものがしんと冴えていた。姉弟と女中と三人住みの小さな家にはわりに広すぎる庭に、しきりに鳴いている虫の声が、金属性の震えを帯びていた。

それが彼には妙に淋しかった。

が、そればかりではなく、実際不思議な淋しさだった。

帰京の日は、旅の慌しさに何にも感じなかつたけれど、翌日から、海鳴の音が時折耳にはつきり蘇つてきた。おかしいなと思うと、冴え返つた月が見えてきた。月ならば東京にも輝つてると思ひ返したが、それがまた変にきらきらと生々しい月で、その下に

広い砂浜がうち開けて、誰かが向うを向いてじつと佇んでいる。俊子だ……と気がつく、頭がぼーとした。胸が切なかつた。やけに身体を揺つてみた。

「静ちゃん、何してるの、震えるような恰好をして。」
姉がこちらを見ていた。

「頭が妙に重苦しいから。」
それで身体を揺るつて奴もないものだけれど、姉は追求して来なかつた。それをいいことにして彼は毎日、頭が重苦しいと云つては家に引籠つていた。

月の光りを浴びて砂浜に佇んでる姿は、夜になると殊にはつきりしてきた。海水着一枚の半裸体で——月夜にしては変だけれど

それがしっくり調和していた——いつまでもじいっと、向うを向いたまま立っていた。……それを、力一杯に而もそーつとこちらへねじ向けてやると、真白な顔が、滝のような月の光りを浴びて、その底からにっこり微笑んだ。

彼はぞつとした。……が、危く喉から出かかっている声を抑えるまがあつた。電燈の光りが静まり返っていた。雨のように繁く虫の音が聞えてきた。外には月が冴えてるに違いなかった。

「いやな人！……何でそんなに私の方をじつと見つめてるの。」
雑誌をぱたりと畳に伏せて、姉は身を起しながら向き直った。

「何でもありません。」

とまではよかつたが……。

夜遅く、彼はふと眼を覚した。蚊帳の上の天井の所に、ぼんやりした円い明るみがあつた。それが白張の提灯で、室の中がぼーっとしている。いやにひっそりしてるな、と感じた瞬間に、月の光りと變つて、磁石のような執拗さで、円いのへ引きつけられてしまった。身動きが出来なくて眼を据えると、それが俊子の顔だつた。真黒な瞳と真白な歯とでにと笑つた。かと思うまに、細そりした指先がその上を掠めて、円いのがゆらゆらと揺いで、ふっと消えた。しいんとなつた。

一寸間があつた……のは、夢とも現ともつかかなかつたからで、本当に眼覚めると、ぞつと総毛立って、手足の先まで冷りとした。そのまま暫くじつとしていたが、それが、俄に恐ろしくなつて、

いきなり飛び起きた。咄嗟に隣りの室へ飛び込んだ。

「姉さん、姉さん！」

釣手を引き切られて落ちてきた蚊帳の下から、漸く匍い出して来た姉は、彼の様子を見てはつと身を退いた。それを構わず、彼は腕に縋りついていった。

「姉さん！」

息がつかないのを、むりに云い進んだ。

「恐いから、こつちへ寝かして下さい。」

姉も慥えていた。何とも云わないで、隣の室から彼の布団をずるずる引張ってきた。耳を澄しながら、間の襖をそつと閉めた。

「蚊帳をつつちやいけません。」

云い捨てて彼は布団を頭から被った。

蚊帳を片付けていた姉は、俄にそれを向うへ投げ出して、布団の中にもぐり込んだ。夜着の下から、震える手先を伸して彼の方へ縫りついてきた。

十

彼はどうしてもその理由を云わなかった、云えなかった。

毎晩、姉と同じ室に床を並べて、蚊やり線香をたいて寝た。けれども、夜中に時々うな魔された。昼間も遠くに幻が浮んでくることがあった。

「自分でも分らないのなら、せめてお医者に診^みて貰ったらどう？
ね、そうなさいよ。」

不気味な不安さを覚え出してる姉の手前、それをも拒むわけにはゆかなかつた。無駄だと知りつつ医者を迎えた。行きたくなかつたので来て貰つた。何を問われても、変な夢をみるというきり黙っていた。強度の神経衰弱という名目の下に、何だか甘っぱい水薬が与えられた。

「ふん。」

鼻の先で嘲つて、室の中をぐるぐる歩き廻つた。それが自分でもおかしくなつて、くすりと忍笑いをしていると、姉が向うの室からじつと様子を窺っていた。

「ばアー。」と冗談におどかしてやろうとしたが、それが何だか真剣になりそうな気がして、自分でも恐ろしくなった。足が悚んで動かなかつた。

けれど、姉の方が妙に悚んでいた。蒼ざめた顔をして、頬の筋肉をびくびく震わしていた。

彼は黙ってその前を通りすぎた。

「何処へ行くの。」

帽子を取ってる時に、後ろから呼ばれた。

「一寸散歩にいつてきます。」

「今日はお止しなさいよ。」そして次に哀願の調子で、「行かないで頂戴よ、つねやも居ないし、私一人だから。」

「つねは何処へ行つたんです。」

「一寸其処まで。」

帽子をまた釘にかけて、黙つて自分の室へ戻つてゆき、縁側に腰をかけて、足をぶらぶらやっていると、彼は急に淋しくて堪らなくなつた。

「なぜかは知らねど心迷い、むかしの……。」

ふと口に出てきた歌を、何度も何度も低くくり返した。俊子が何処かに立つてるような気がした。

薄曇りの佗びしい夕方だった。かさかさと枯葉の音がする。それが胸にしみ渡つた。耳を澄していると、静に表の格子を開く音がした。それから一寸間を置いて、喘ぐような声で、

「急いで来たものだから息が切れて。」

「御免なさい、ふいにお呼びして。」

「いいえ。そんなにお悪いの。」

「それがねえ……、」

とだけ聞えた。

玄関でひそひそ話してるのは、姉と俊子だった。

彼は我を忘れて立ち上った。頭がかつとして胸騒ぎがした。まごまごしてる所を、玄関から上ってくる俊子とぼったり眼を見合った。どうにも出来なかった。頭を垂れて、其処こゝらに坐った。熱い塊りが胸の底からこみ上げてくるのをじつと堪こえた。

俊子はつかつかとやって来た。

「御病氣ですってね。ちつとも存じなかつたものですから……。」
それを姉が側から引取った。

「いえ、病氣というほどのことじゃないのよ。神経衰弱ですって。」

「そう。」

一寸まごついた其場しのぎの返事をして、姉と意味ありげな目配せを交した後に、また彼の方へ向いて、

「海は頭に余りよくありませんのよ。私も帰ってから四五日の間は、何だかぼんやりしていましたわ。」

それらの様子が変だった。が、青っぱい羽二重の帯を胸高にしめ、上からお召の羽織を背抜き加減に引っかけて、その紐を胸に

小さくきつと結え、無雑作に分けた髪を耳の上で一つねじって低めに束ね、細い頸筋を差しのべて、心持ち眉根を寄せながら、睫毛の長い澄みきつた眼で彼の方を窺ってるのは、やはり以前から見馴れた俊子だった。

「おかしいぞ、」と思う心が眼に籠って、彼女の顔をじつと眺めた。眼を外らしたのを、更にまじまじと眺めてやった。

「どうしたのよ、黙ってばかりいて。」

その方へ眼をやると、姉もまた顔を外らした。

「どうしたんです。」とこちらから尋ねてやりたいくらいだった。が、それから彼女達が、学校——二人は女子大学の同窓だった——へは十五日頃から大丈夫だ、というようなことを話し出した

のを聞いてると、少し分りかけてきたような気がした。

「今日は幾日です。」

「八日よ。」

姉の言葉と一緒に、鼻の高い痩せ形の真白い顔がこちらへ向けられたのを見て、彼は妙にぎくりとした。頭の中がまたもやもやとしてきた。

十一

無理に姉へねだって夕食の時少しばかり飲んだ酒のために、彼は身体がぐったりしてしまった。寝転んでると、自分でもおかし

いほど眠くなつた。姉と俊子との話を音楽のように聞きながら、いつのまにか眠つたらしい。

眼を覚すと、室の中には誰も居なかつた。電灯の光りが余り明るすぎた。寝返りをしてみた——いつのまにか枕をして襦袢を着ていた。

「静ちゃん、眼がさめたの。」

わざと返辞をしなかつた。

暫くすると、また次の室から前より低い声で、

「俊子さんもいらつしやるから、トランプでもしませんか。」

それでも黙つていた。俊子が帰ろうともしないで落付いてるところで、食後姉と物影でひそひそ話していたことが、頭の底で気に

かかっていた。

あたりがしいんとした。

長い時間がたったようだった。……

「そんなでもないじゃないの。」

「あなたは夜中のことを知らないからよ。」

「毎晩なの。」

「いいえ、一晩置きくらい。」

「そう。不思議ねえ。」

「親戚に精神病の人は居ないかって聞かれた時は、私どうしようかと思っただわ。」

「だって、あれくらいならまだ大丈夫よ。伯母さんやなんか相

談して大袈裟になると、却つて神経を苛立たせはしないかしら。」

「それもそうね。」

「もう少しそつとしておいて様子を見た方が……。」

……それで分つた。彼はもう我慢が出来ない気がした。口惜しかった。いきなり起き上つて、次の室に飛び込んだ。

色を失つた二つの顔が並んでいた。

「姉さんは、人を気狂い扱いにしてるんですね。」

見上げてゐる二つの顔が瞬きもしなかつた。

「私は気が狂^ふれてやしません。」

怒鳴りつけると、胸がすーつとした。同時に全身の力がぬけてしまった。其処に身を投げ出して泣いた。

肩の上に手が二つ置かれた。やさしい息が耳のすぐ側に感ぜられた。待ってみたけれど、何とも云つてくれなかつた。堪らなく淋しくなつた。

「云います。みんな云つちまいます。……俊子さんはみんな知つてる筈です。あの晩から、あの海に出た晩から……。」

彼は何を云つてるのか自分でも分からなかつた。それでもむちやくちやに云い続けた。云つてしまうと、頭の中が空からつぽになつた。ひよいと顔を挙げると、大きく見開いた姉の眼がすぐ前にあつた。姉の手につかまって、俊子が齒をくいしばつていた。

そのままじつとしていた。三人共石のようになって身動きさえしなかつた。

空っぽになった彼の頭に、ぽつり、ぽつりと、正しい記憶が蘇ってきた。眼の前がはつきりしてきた。

「俊子さんを想ってるのじゃありません。」

吐き出すように云ったが、その言葉が自分の胸に返ってきて、顔が真赤になった。それをごまかして立ち上った。……が、どうしていいか分らなかつた。右足でとんと跳ねて、つんと伸した左足の踵で、ぐるりと廻った。二度廻ってから云った。

「もう何ともありません。」

頭の中がはつきりしてきた。余りはつきりしたので、それが一寸変だった。も一度左足の踵で廻った。

俊子がはらはらと涙を落した。

彼はふーっと息をした。頭の中がしっかりしているのを感じた。静かだった。虫の声が雨のように繁く聞えてきた。外には月が冴えていそうな夜だった。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第一巻（小説）」[#「1」はローマ数字、1-13-21]」 未来社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「新小説」

1921（大正10）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：松永正敏

2008年10月19日作成

2011年11月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月明

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>